



「《乙女》は誰もが持っている。」

「女々しい」なんて言葉は誰が言い出したのだろう。その象徴の一つとも言える「乙女心」。『万葉集』や『源氏物語』のいにしえの時代から、戦後の少女漫画や近年では『新世紀エヴァンゲリオン』まで、どんな社会になっても充足しない他者との関係を、女のみならず男も同じく「女々しく」悩み苦しんでいる状況は変わらない。

町田夏生が作り出す世界は、そんな日常の中にありふれてはいるものの、各人が心の奥底に見透かされないように隠した、他者への報われない愛情の集合体「乙女心」を、生々しいまでにえぐりだしている。そんなことを言うと、彼女の作品の表層的なイメージだけを情報として与えられた鑑賞者は意外な印象を持つであろう。アクリルの淡くやさしい色彩で描かれたどこか耽美的な人物像とそれを取り囲む花卉の集合体。どこにそんな要素があったのだろうか。

しかし、今回彼女の描く一部の人物像がある行動に出た。周囲を取り囲む花卉を口元に寄せ、それを咀嚼しだしたのだ。しかもそこから滴り落ちるのは水溶液ではなく鮮血…。

現代の消費社会・物質至上社会の中で、人間心理も数量化および言葉で具体化される時代となっている。彼女の作品において乙女心の象徴として描かれている花卉。その量で測られる乙女心の強弱とは裏腹に、花卉を噛み砕く人物像とそこから流れる鮮血の意外性は、人間の持つ科学では解決できない「乙女心」として彼女は新たなステージの作風として描き始めているように思える。現代の心理学は表層に対象が具体性を持って現れると同時に、そこから新たな神秘を発見しさらにその殻を剥く。そんなことが今後も永劫に反復し続けるのではないだろうか。科学が進歩を続けても、人間の不可思議な部分は断続的に発生するものであり、彼女の花卉も摘めば摘むほどより神秘的な花をいたちごっこのように、そして「乙女心」の発生により自らの存在を証明しているかのように咲かし続けるのではないだろうか。

私事だが彼女との出会いは、私が美大で学芸員をしていた頃にグループ展を企画した時の一出品者・一学生であった。しかし彼女のテーマ性とその表現のために一定の素材にこだわらずに幅広い手法を検討し、かつ発表の場を様々なものが行きかう有機的空間として捉える姿勢に魅了され、以後5年間私が企画できる場を作り出すまで大事に見守ってきた作家である。私にとっても、今回ようやく彼女を100%支援できる場を持たせた事に喜びを覚える。

彼女は今回も有機的な空間構成で、《乙女》を体感させてくれる。会場を訪れた人々が心に芽を植えつけられ、その場を離れたときに開く心の花卉を気持ち悪がらずに、自然に咲かせて欲しい。あなたの心にも「乙女心」はあるのだから。